



# 北アルプスのライチョウをとりまく “今”を知る

## 令和6年度信州自然講座開催報告

研究所の信州自然講座（市立大町山岳博物館・長野県環境保全研究所連携協定更新記念、大町市制施行70周年記念事業）「北アルプスのライチョウをとりまく“今”を知る」を、令和7年（2025年）2月8日（土曜日）午後に、開催しました（共催：大町市、大町市教育委員会）。当日は大雪の中、84名の方が参加し、講演や展示をご覧くださいました。詳細は、所ホームページ（右の二次元コード）をご覧ください。本特集では、講演内容を紹介します。（浦山 佳恵・高野 宏平／自然環境部）



当日の展示を見る参加者



## 中部山岳地域の近年の気候変動

### ◆日本の気温の経年変化

日本の気温の変化を調べるために、気象庁は全国15か所の気温観測データを長年集めています。これらの地点は、都市化の影響を受けにくく、日本全体を表すように選ばれています。気温の変化を見る際には、15地点の平均気温を比べるのではなく、その年が「ふつうの年」と比べてどれくらい暑かったか、寒かったかを詳しく調べています。

日本の平均気温は、1898年から2023年の間に、100年あたり約1.35℃の割合で上昇しています。これは、世界平均（0.78℃／100年）よりも速いペースです。日本の気温は、常に一定のスピードで上がっていたわけではなく、大きく分けて3つの時期に分けることができます。近年の35年間は、特に気温上昇が加速しており、100年あたり約2.56℃も上昇しています。このように、長期的な温暖化傾向の議論と数十年単位の気温変化の議論とは区別する必要があります。

また、季節によって変化の仕方が異なります。夏と秋は、継続的に気温が上昇する傾向が見られます。冬と春は、1945年頃までは比較的寒い時期が続き、その後は安定した状態が続きました。1989年からの冬季平均気温はジャンプして上がり、その後は変化傾向が安定しています。

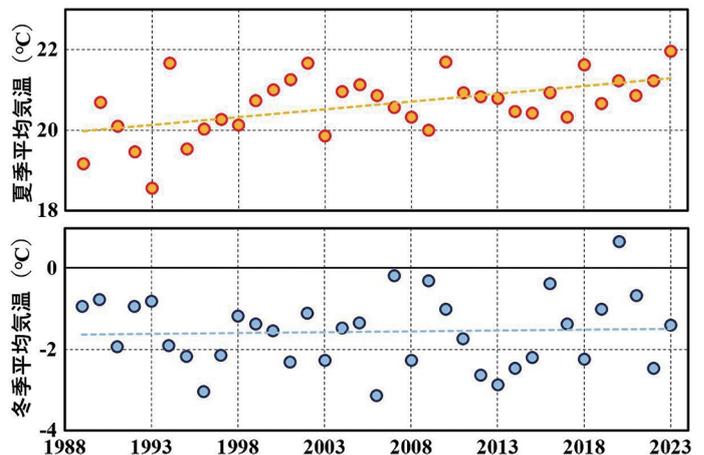
### ◆中部山岳地域の気温の経年変化

中部山岳地域（東経137度から139度の範囲、ア

メダス観測地点については標高700メートル以上の地点のみ）の1989年から2023年までの気温変化を詳しく調べました。その結果、春、夏、秋には、多くの観測地点で気温が上昇する傾向が見られます。一方、冬はすべての地点で統計的に有意な変化がみられず、むしろ気温が減少傾向にある地点も複数あります。

標高が低い地点の冬の気温は0℃前後なので、気温が上昇すると雪は降ってくる途中で融けて雨になります。しかし、標高が高い地点の気温はわずかの気温上昇ではプラスの気温にはなりません。また、気温が上昇すると大気中の水蒸気量も多くなるので、冬の降水である雪は多くなると考えられます。上高地を流れる梓川の融雪水量は、近年増加傾向にあり、流域内の降積雪量も増えているのです。

（鈴木 啓助／市立大町山岳博物館 名誉館長）



大町市の冬と夏の季節平均気温の変動